

川端康成と西川博士の「温泉報国」

—雑誌『温泉』にみる『雪国』の同時代的言説

李 明 喜

1. はじめに

『雪国』が書かれたのは昭和十年から二十三年、戦前・戦後にまたがる約十四年間のことだった。その最初の分断掲載が開始される三ヶ月前、昭和九年十月に川端康成は日本温泉協会の雑誌『温泉』に「温泉雑記」という文章を発表した。そこには「ほんとうの温泉文学」とは何かに関する川端自らの提起や目指す理想郷が述べられている。時期の近さからいって、これら二つが無関係であったとは考えがたい。すると、川端が『雪国』を生み出していくとき、自らが提起した「温泉文学」という問題は、川端に何をもたらしたのだろうか。しかもそれを今まで縁のなかつた『温泉』という雑誌に投稿したのはどういうことなのか。本稿では、『雪国』が「温泉文學」の実践であることを前提として論を進め、「温泉文學」の理想郷について述べた「温泉雑記」の掲載誌『温泉』を通して、『雪国』の同時代的な検討を行うことを

目標にしたい。そのためには、まず川端と日本温泉協会の雑誌『温泉』の関係を明らかにしなければならないが、その手がかりになるのは、「西川博士」という人物の存在である。なぜ川端は『温泉』という雑誌に文章を出し、なぜ一回きりの投稿で終わつたのか。この問い合わせに対し、雑誌『温泉』における記事や言説を照らし合わせることによって、川端がどういう時代的状況のなかで、〈温泉場〉を物語に取り入れていたのか、その意味や効果を解明していきたい。

川端文学において〈温泉場〉や〈温泉文化〉に目を向けることは、〈温泉場〉を舞台・題材とする数多くの作品^(注1)が存在する以上、不可欠であるにも関わらず、從来殆ど研究されなかつた。〈温泉場〉という特殊な空間を「当たり前」の空間であると看過してしまつては、川端文学がこの空間に託したことの意味も見失つてしまふ。〈温泉場〉という場所が発信する機能は川端文学に何を

もたらしたのか。川端が雑誌『温泉』において追い求めた「温泉文学」という問題を念頭に置きながら、その掲載誌から同時代の言説を探ることで、「雪国」の読みがどう変わるのかを考察していきたい。

2. 日本温泉協会の雑誌『温泉』と川端

川端が「温泉文学」の在り方を提起した文章は、日本温泉協会の機関誌『温泉』に掲載された。雑誌『温泉』はどのような性格の雑誌なのか。また川端はいかなる意図をもつて投稿したのか。その疑問を解消すべく、この雑誌の発行元「日本温泉協会」という組織について見てみたい。以下、協会の現在のホームページの一部分と、川端の文章が収められた昭和九年十月号に載っていた廣告である。

日本温泉協会は温泉に関する知識の普及、「世界無比の天恵的我が国の温泉」を利用して、温泉地の發展に貢献することを目的として、内務省、鉄道省の官僚が多く携わった組織である。^(注3)機関誌『温泉』は、昭和五年四月から毎月発行され現在まで続いている。同誌は、機関誌という特徴一活動内容を発表・宣伝・連絡する機能を果たすにとどまらず、沿革の中に「昭和八（一九三二）年会長直属の学術部委員会を設け、学界各方面の権威者を網羅して温泉の科学的研究と指導にあた」つた（前掲ウェブサイト）と記されているように、温泉の科学的研究に注意を払つていて、医学博士の文章の掲載などが目立つ。そのなかで、文学者川端が「温泉と文学」の在り方について語った「温泉雑記」の意味は特別である。

泉界統合団体です (<http://www.spa.or.jp/>)による)

（内務省・鉄道省・ジャパン・ツーリスト・ビューロー三者

協力に依る）日本温泉協会は申すに及ばず世界無比の天恵的我が国の温泉を充分に開発利用し、国民の保健に資し一方温泉地の發展改善を目的とするものにして、斯界の学者、鉄道省、内務省、ソーリスト・ビューロー、温泉旅館業者、交通関係者等の協力発起によるものであります。（雑誌『温泉』昭和九年十月号、p44～45）

川端が追求した理想の「温泉文学」とは

「温泉雑記」（『温泉』昭和九年十月）は、川端の温泉と文学に対するスタンスが読み取れる重要な手がかりになる作品として、内容的にも時期的にも意味が大きい。本文を見ていく。

例えば「金色夜叉」や「不如帰」は余りに有名であるけれども、熱海や伊香保を書いた小説とは決して云へない。書いたるのは、熱海や伊香保の景色だけである。舞台に借りた

に過ぎない。（中略）眼中にあるのは、貫一と武男に過ぎない。

彼等は旅行者である。A. 温泉場の人間ではない。温泉を取り入れた小説や芝居は少くないが、その殆んどすべてはこの旅行者の文学である。ポスターの絵や広告写真に近いものである。宿屋の客の眼の印象に過ぎない。温泉場から生れた文学ではない。その土地の人々の生活の眞実の姿とはかかはりがない。（中略）つまり、旅人のあわただしい眼の印象のせゐである。どの温泉文学も、その土地の人から見れば、嘘八百だらけにちがひない。B. お座敷の芸者、ホテルの踊子、舞台の女優をいくら写生したつて、彼女等の生活の眞実をとらへてゐないやうなものである。温泉文学はみんな作者が客間に座つてゐる。C. 料理場や女中部屋や金庫のなかを見てもない。ましてD. 温泉宿と村人との関係、外来資本の

温泉経営とその土地との関係、そんなものは夢である。（中略）してみると、ほんたうの温泉文学は滞在客の恋愛を歌つたり、景色の美しさを讃へたり、風俗の珍しさを写したり、そんな上つ面の浅いものでなく、E. 土地の人々の生活の醜の底に掘り入るものであれば、（中略）旅人の眼を待つより、かういふ作品が温泉場の内から生れて来ればよいと思ふ。『川端康成全集第二七巻』新潮社、一九八二年、p78
(※記号 傍線等は引用者による)

これまで「温泉文学」とよばれていたものは何だつたのか。川端は温泉と文学の在り方にについての現状を述べ、問題を提起する。傍線部を中心みると、川端は、Aのように既存の温泉文学は「宿屋の客の眼の印象に過ぎない」と批判し、温泉場から生まれた文学とは言えないと。Bでは、温泉場の女性たちの生活の眞実を捉えるべきであると述べている。さらにCでは料理場や女中部屋や金庫のなかまでを見るべきだと述べる。もっとも注目したい箇所はDである。川端は「温泉宿と村人との関係」「外来資本の温泉経営とその土地との関係」などが描かれることを望むこと 자체を、「夢」であると表現している。つまり、この文章は「温泉文学」の現状を考える際、今後進むべき道が「夢」のように遠い、とい

う意味に読み取れる。

すると、川端はどういう対策を取つて理想とする「温泉文学」を描き出そうとしたのか。続く文章Eみると、川端が取つた対策は「土地の人々の生活の醜醜の底」を見て「温泉場の内から」作品を生み出すことであり、これが「夢」の文学を実現させる方法であると確信している。ということは、このときにはすでに川端にとって「温泉文学」は、一つの文学ジャンルとして認識できていたということになる。もし川端がこれを強く意識し、徹底的な〈温泉場〉の内部の目線を求めて、新たな文学ジャンルとして立ち上げようとしていたのならば、このことは川端文学を研究する上で、実に重要な手がかりとして受け止めるべきではないか。この川端の志と、実際書かれた数多くの「温泉文学」との関係は別稿で考察することにして、ここでは、川端が「温泉文学」に向き合う姿勢と同時代の〈温泉場〉をめぐる言説とを絡めて考えたい。

では、この「温泉雑記」が掲載された雑誌『温泉』の同号をみてみる。左に示した写真は『温泉雑記』の初出雑誌、『温泉』昭和九年十月号の表紙である。以下にその主な内容を示す。



温泉

十月號

卷頭言 温泉場の設備に就て

常務理事 高田寛
川端康成

温泉雑記
結核、腺病質、淋巴質と温泉

理事 酒井谷平

飲泉コツブ雑考

評議員 三井高陽
伊豆大島の微温泉とその利用法

温泉一夕話

理学士 遠藤六郎

温泉料理と温泉体操

青木槐三

趣味と紀行だより

医学博士 西川義方

牟漏の崎の湯

（※傍点引用者）

温泉施設巡験記

（※傍点引用者）

さらに、編集後記には、

○本月号は読むべき物が多くあります。川端康成先生の隨筆あり、酒井先生は其の蘊蓄を愈々発表せられ療養者にとつて

真の福音と言ふ可きであります。

とあり、「川端先生」の文章を、目次では雑誌の冒頭一常務理事の巻頭言のすぐ後に掲げている。おそらく大正十五年の『伊豆の踊子』で名を知られた川端なので、

「川端先生」と呼ばれ、療養者に「真の福音」を与えるという印象を強めるため、目立つように置かれているのではないだろうか。

川端が普段文章や作品を載せた雑誌は、ほとんど文芸雑誌だった。『文芸春秋』『文芸時代』『改造』『中央公論』『婦人公論』などがそれであり、時には『少女俱楽部』など子供むけの雑誌もあつたものの、雑誌『温泉』といふのは、珍しく思われる。また雑誌『温泉』に文章を載せたのは、この「温泉雑記」の一回きりである。これはどういうことなのか。その答えを追求するための手がかりは、先に挙げた目録のなかにある。それは川端と名が並べられている医学博士「西川義方」という人物である。

この人は雑誌『温泉』の「学術部委員」として数多くの文章を発表しており、昭和十年代の本雑誌において、その名をしばしば目に見る。たとえば、「日本温泉の長所を語る」(昭和八年九月～昭和十年一月号)の連載を

はじめ、「日本温泉史料雑纂」(昭和十四年十一月～昭和十五年二月)、「各個擊破」(昭和十一年九月、十月)などがある。雑誌『温泉』以外にも著書『温泉須知』(昭和十二年、診断と治療社)など、実に多くの文章を残している。

さて、この西川博士という人物は、川端とどういう関わりがあつたのか。平山三男氏の『川端康成『雪国』湯沢事典』(湯沢町役場・教育委員会、平成九年)によれば、西川博士は宮内省侍医であり、川端の掛け医であつたと説明している。

注5 西川博士

宮内府侍医頭であつた医師。この年、異常な発熱があり、二月末から三月へ前田外科病院、六月から八月初めへ慶應病院へと入院。結核や腎臓の心配をしていたので、西川博士の診察も受けていた。(p34)

全集の「『雪国』の旅」(昭和三十四年)からその日記と作者川端の〈註〉を確認すると、以下のようにある。

昭和十年九月二十五日夜、西川(義方)博士宅に行き、診察を受く。九月二十七日青山御所のレントゲン科(註、西川博

士が侍医だつたので。」へ行く。朝食して来たため、胃は写

せず。「十月四日、夜、「読売新聞」の原稿出す。西川博士

よりレントゲン写真の結果の手紙。夜中十一時に。（註、駒子が来る）（「川端康成全集第三十三卷」新潮社、一九八二、p171）

川端が西川の診察を受けていたのは、この二箇所から確認できる。川端が『温泉』に文章を寄稿したのは、医者西川との関わりがあつたからだと見られる。そうでなければ、今まで縁のなかつた雑誌『温泉』にいきなり文章を発表するとは考えがたい。つまり、西川博士は、医者でありながら温泉の在り方をつねに考えるものとして、自身が学術部委員を務めている『温泉』のため、自分の患者である川端に、寄稿を依頼したのではないか。

雑誌『温泉』をめぐるこうした二人の関係が無視できないものであつたことは想像するに難くない。

西川博士の「温泉報国」

こうした人間関係から注目したいのは、西川博士の文章である。雑誌『温泉』の学術部委員として、数多くの文章を残しているなかで、昭和十二年二月の「温泉報国」という記事には、まさに西川の考え方が如実に表れ

ている。

「温泉報国」（『温泉』昭和12・2）今日は交通機関が発達して居るために、何所の温泉へ行くにも、簡単に行けるのであります。懲りいふ結構な時代、懲りいふ立派なお国に生活して居りながら、欧米の人達よりも早く死ぬといふことは、體かに勿体ないことがあります。日本人としては大に考へなければならぬ点であります。さういふ見地に立つて、弘く、且充分に、温泉を利用して、大に健康を増進して、眞面目に日々の分担に熱心して、家を治め、相睦んで、いよいよ國のために働くやうにしたい。此意味での温泉報国は、小生の切に望むところであります（p15）

「温泉報国」とはどういうことなのか。ここでは「家を治め」「國のために働く」体造りのための温泉利用を訴えている。この他にも、西川の同じ題目の記事がもう一つある。「温泉報国」とは何かに関する説明めいたものである。少し長いが引用しておく。

西川義方「温泉報国」（『温泉』昭和16・12）

私は、便宜上、温泉の持つ治療的要素を総括して「泉格」と称へてをります。畢竟、温泉それ自体としては、泉質、泉

温、湧出量、泉源の位置等々の顧慮であり、これに、氣候、標高、地質、水質、森林、動物等のくさぐなる地的環境

と、それから大小、伝統的史的環と、人為的技術を以て遺憾

なく補強された裝備された温泉の治療的要素、それ等すべて

を綜合しての表現であります。かゝる意味に於けるその全泉

格を挙げつくるしての、自然調律への豊かな復帰運動、それ

を、祖國愛の嚴虔たる大磐石に立脚して、四民平等に恵沢せ

しめたいといふのが、十数年来私の謂ゆる「温泉報国」の

語義であります。（中略）やつぱり環境の民族的な、国本的

な利用を強調した限りに於て、私どもの温泉日本に対しての

予てからの抱懐と相交感し、相反響して、思はず膝の進むを

禁じ得ぬのであります。かくして、温泉と環境とは、啻に消

極的に啻に退要的に、療病的な偏狭にのみ囚はれるといふや

うなことは、少くとも生々弥榮なる我等の日本に於ては、到底、許されないはずであります。（中略）約言しますれば、

たゞ單なる体力の鍛錬向上に止まらずして、「身体を通じて

の教育」たらしめんとの止むなき庶幾に他ならぬのであります。

この点に関しての盟邦ドイツのヒツトラー總統の熱誠に

対しては、夙に敬意を表するに資なる私どもでは、金輪際あ

り得ないのであります。（中略）遂に、茲に、私は吾等の先

人達が、温泉そのものを神ながら尊信し來つたその日本的なことを顧みて、おのづからなる感謝をつゝしみさゝぐるの

であります。（昭和十六年十月二日、於向陵櫻松居義方識）
(D24-4)

最初の傍線部から分かるように「温泉報国」というのは、西川博士が十数年間追い求めた概念であった。温泉と環境を国家・民族・祖國愛のために利用することを強調するものである。昭和十二年の記事よりも明らかに「國家」が強調されている。つまり、当時の温泉は、戦時下という背景において、医者の権威ある言葉によつて、国家的な使命を担つていたのであつた。さらに「温泉報国」のような国家的な温泉利用の傾向は、昭和二十年に向かつてますます強くなつていく言説であつた。

井上芳広「戦時体制下の湯河原」昭和13・1『温泉』(第九

卷二号「國家精神総動員」の広告あり)の記事・「国民銃後」の声援は實に涙ぐましく、津々浦々まで老幼男女を問はず、赤誠の努力は日を逐ふて益々高調に達して居る事は讀者諸子の周知の事実である。我が湯河原町振興会に於ても卒先して本年度浴客慰安の諸事業を打切り、金五百円を国防資金として獻納し、又其他の団体よりも出征將士の武運長久の祈願をなし御守數万を陸海軍に獻納、此の外戰勝祈願祭とか出征將士家族の救恤々兵慰問等多々ある。(D104)

湯河原駅長の文章である。戦時体制下において、温泉地の関係者が、具体的にどのように「献納」したのかが示されている。資金を集め、慰安事業を打ち切るなど、温泉地が当時の時局をどう乗り越えようとしたのか、時局にどう向き合ったのかが伺える。昭和十三年、「温泉厚生運動」^(註)が総力戦体制に伴い「人的資源」を確保するために繰り広げられ、昭和十七年、日本温泉協会が本運動の中央指導機関として選ばれたことを踏まえて考えれば、この時期の〈温泉場〉の在り方は問われ続けていたことが分かる。

吉植庄亮「新らしき温泉觀 戦ひぬく力の泉」昭和18・2
総力戦を思ふ時、先づ心に浮ぶのは私といふ事である。この個の私が肉体的にも精神的にも立派になつてゐる事なしには、総力戦は必勝を期することは出来ない。まことに今日ほど、微粒に似た私の存在であり乍ら、しかも抜きさしのならぬ国家の構成分子となつてゐる事は無い。この事を私達は先づ考へなければならぬ(中略)一人の私ならぬ私を見事御奉公出来得るやうに、百年の勝を勝ち得るやうに立派にする為の入浴である。(『温泉』(第十四第一号—特集増産と湯治) p.38)

「百年の勝を勝ち得る」ため、という温泉の使命を強調することが、戦時下における温泉場に対する言説であつた。温泉の利用をめぐる人々の営みは、日本の社会的状況と呼応し合いながら様々な〈志向と文化〉を生み出したものと見られるが、戦争を背景にした時代の温泉の在り方は、「戦ひぬく力の泉」つまり「温泉報国」が強調されたのであつた。言い換えれば、温泉場の在り方が時代の要請によって自ら変化し柔軟に対応していたことを意味するだろう。「國家精神総動員」の廣告とともに載せられた、昭和十三年一月号『温泉』(第九卷一号)の記事はその一面を表している。

では、この時期、川端はどうだったのか。〈客と温泉場の女性〉の物語を描いている川端にとって、こうした温泉場の言説はどう受け止められたのだろうか。またこのことは、『雪国』の内容にどう影響を与えたのか。

3. 〈温泉場〉をめぐる時局と『雪国』

この時期における川端の物語の世界に話を戻したい。まず、冒頭で紹介した「温泉雑記」を視野に入れながら、「温泉文学」としての『雪国』に焦点を当てたい。『雪国』の〈温泉場〉の描かれ方、それが物語にもたらした影響について考察する。それから、同時代の『雪

国」の批評に注目したい。『雪国』というのは、昭和十年代から二十年代まで十回にわたった分断掲載物を纏めたものであるため、発表当時の形は現行の『雪国』とは異なっている。したがって、本章の後半では、発表当時の形（プレオリジナル）を手がかりに、「文芸時評」欄において、この『雪国』の分断掲載物が同時期にどんな評価を受けていたのかも俎上に載せたい。つまり、温泉場をめぐる言説と、川端文学の同時代の批評を参照して、『雪国』に込められた〈時代意識〉を明らかにすることを試みる。

逢瀬の物語における〈温泉場〉という装置

無為徒食の島村は自然と自身に対する眞面目さを失ひがちなので、それを呼び戻すには山がいいと、よく一人で山歩きをするが、その夜も国境の山々から七日振りで温泉場へ下りて来ると、芸者を呼んでくれと云つた。（『雪国』旧版・戦前版、昭和十二年六月、p21）

東京出身の島村は、自分の眞面目さを取り戻すため登山をする途中、温泉場に立ち寄つて「芸者を呼んでくれ」と頼み、結局駒子に出会う。それから彼女の情熱的な生き方に心惹かれ三回にわたつて温泉場を訪問する。

要するに『雪国』読解の前提是、島村が継続的に〈温泉場〉を訪れることにより、また一人が〈温泉場〉で別れ一再会を繰り返すことにより成り立つ。

では、〈温泉場〉で繰り広げられる二人の出会い—別れ—再会の逢瀬を詳しく辿つてみたい。二人は〈温泉場〉でどのように変わっていくのだろうか。最初の出会いは、島村が駒子の「清潔さ」に魅了されていく中、「はじめからただこの女がほしいだけだ、それを例によつて遠廻りしてゐたのだと、島村ははつきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて來た」（旧版・戦前版、p20）のように、島村の「ほしい」気持と駒子の「友達で居たい」心理が二人の関係を発展させる。ついに駒子は宴会の帰りに酒に酔つて島村の部屋にいつつ関係を結ぶ。駒子にとつての温泉場は、仕事の場でありながら「恋の場」でもあつた。

足の下の畳までが冷えて来るので、一人で湯に行かうとする」と、「待つて下さい。私も行きます。」と、今度は女が素直について來た。彼の脱ぎ散らしものを女が乱れ籠に揃へてゐるところへ、男の泊り客が入つて來たが、島村の胸の前へすくんで顔を隠した女に気がつくと、「あつ、失礼しました。」「いいえ、どうぞ。あつちの湯へ入りますから。」と島村はと

つさに云つて、裸のまま乱れ籠を抱へて隣りの女湯の方へ行つた。女は無論夫婦面でついて来た。島村は黙つて後も見ずに温泉へ飛び込んだ。(旧版・戦前版、p59~60)

また駒子は、紅葉シーズンの忙しい時にも関わらず、仕事の途中島村に会いに来て恋人同士の入浴を楽しむ。一般的に、温泉場では行きずりで終わる出会いだと思えるのが、このように島村と駒子の場合は〈温泉場〉によつて深く結び付けられ関係が発展していく。(温泉場)は人との出会い、とりわけ「恋の場」として機能する。そのため二人は一回の逢瀬ではなく、再会を求めるようになり、作者は島村を彼女の働く温泉場へ三度訪問させる。続いて、再会後の別れの場面の表現を見てみたい。

島村はなにか非現実的なものに乗つて、時間や距離の思ひも消え、虚しく体を運ばれて行くやうな放心状態に落ちると、單調な車輪の響きが、女の言葉に聞えはじめて来た。(中略)島村はふつと涙が出さうになつて、われながらびつくりした。それで一入、女に別れての帰りだと思つた。(旧版・戦前版、p117~118)

駒子との温泉場での逢瀬を、この世にないような「非

現実」「虚し」、また「涙」という言葉で表現しているように、〈温泉場〉が物語にもたらしたのは、どこかのホテルなどでの逢瀬ではもはや成り立たない別世界である〈温泉場〉ならではのものではないだろうか。本論では〈温泉場〉という場所(トポス)が物語に及ぼしたものであると、あえて強調して捉えたい。なぜなら、〈温泉場〉という空間の解釈を文化的表象の問題とする以上は別に、川端文学において〈温泉場〉の機能や役割はある一定の傾向があり、それは川端文学の本質を論ずるに有効であると考えられるからである。次に示す三回目の訪問の場面では、こうした〈温泉場〉での逢瀬が一面的なものではなく、深い意味合いを帯びていることが表されている。

駒子は少し後れて来た。廊下に立つたまま、真向きに島村を見つめて、「あんた、なんしに来た。こんなとこへなんしに来た。」「君に会ひに来た。」「心にもないこと。東京の人は嘘つきだから嫌ひ。」(p124~125)「一年に一度でいいからいらっしゃいやいね。私のこゝにある間は、一年に一度、きつといらつしやいね。」年期は四年だと云つた。(中略)その三年足らずの間に三度來たが、その度毎に駒子の境遇の変つてゐる

ことを、島村は思つてゐた。(旧版・戦前版、p139~140)

妻子のうちへ帰るのも忘れたやうな長逗留だつた。離れられないからでも別れともないからでもないが、駒子のしげしげ会ひに来るのを待つ癖になつてしまつてゐた。さうして駒子がせつなく迫つて来れば来るほど、島村は自分が生きてゐないかのやうな苛責がつのつた。(『雪国』創元社(決定版・戦後版)、昭和二十三年十一月、p190)

駒子の島村に對して迫る氣持ち、島村の妻子を忘れたかのやうな氣持ちだけがつのる。このように〈温泉場〉がもたらした人間關係は、島村と駒子を一回のみの主客關係に終わらせなかつた。(『温泉場のトボス力』)は人物關係を深く結びつけ、これによつて、『雪国』は成立させられたのである。また、その他の表現からも(温泉場のトボス力)が、さりげなく物語の底部に敷かれていることがうかがえる。

「鉄道省の温泉展覽会の時に、休憩所ですか、茶室を造りま

して、その屋根はこの萱で葺きましてな。なんでも東京の方がその茶屋をそつくりそのままお買ひになつたさうでござりますよ。」「萱ですか。」と、島村はもう一度ひとりごとのやうに呟いて(決定版・戦後版、p108~109)

島村の三回目の訪問の際、温泉宿の人と萱について対

話する箇所である。萱が「鉄道省の温泉展覽会」の茶室作りに使われたということである。雑誌『温泉』によれば、「温泉展覽会」は、「昭和十一年八月十五日大阪松坂屋に於て本会及大阪鐵道局並に日本旅行協会共同主催のもとに温泉展覽会を開催することにした」(『温泉』七卷九号(昭和十一年))「東日本温泉展覽会—八月十九日から二七日迄横浜市野澤屋で開催するもので、(中略)西に大阪、東に横浜の展覽会は今夏の好一対の温泉日本の氣焰を吐くものである」(同号)と記される。それから主に陳列されたものは、各温泉地のジオラマ、写真、記念物、土産品、湯の素などだつたといふ。川端は、萱の話の中で、日本温泉協会と鉄道省が開催した「温泉展覽会」に触れている。これは「温泉文学」の在り方を提案した川端にとつて温泉場(の内部)を小説にリアルに反映しようとする立場の表れではないか。それから、「こ₁は温泉場」であることの意味も作中に示唆されてい

る。

「さう。ほんたうにみんなさうだわ。私の生れは港なの。こ₁は温泉場でせう。」と、女は思ひがけなく素直な調子で、「お客はたいてい旅の人なんですもの。私なんかまだ子供で

すけれど、いろんな人の話を聞いてみても、なんとなく好きで、その時は、好きだとも云はなかつた人の方が、いつまでもなつかしいのね。忘れないのね。(略)」(旧版・戦前版、p28)

駒子の意識の中では「温泉場」のこちら側とあちら側を分けている。駒子にとつて「温泉場」が可能にしてくれる旅人との関係は、いかなるものなのか。「ここ」は「温泉場」であることの意味合いは何だろうか。駒子は、島村と逢瀬が重なるにつれ身の上が変わっていき職業的な逸脱を重ねる。島村も東京という日常から離れ温泉場に身をおいて長期滞在する逸脱を体験する。また作者も同じく、日常の創作場から離れ、温泉場に創作の力を求め逗留しながら執筆するという、創作環境への逸脱を行っている。つまり「温泉場」がもたらした人間模様は、その人物を逸脱させるのである。したがって、「雪国」は、恋の場、遊興の場、逸脱の場といった「温泉場」の機能が物語の根幹に関わって作り出されたと言えよう。

そこで行われる人間の営みを求めたことにおいては共通しているように思われるが、しかし、その姿勢は根本的に異なる。おそらく川端は、国家的温泉利用が重んじられていく雑誌『温泉』に、違和感を感じ、一回の発表で、関係を終わらせたのではないだろうか。なぜなら、現実から逸脱した個人の温泉場での逢瀬が重要な価値となる『雪国』の世界と、国家的な温泉利用とは相容れないからである。つまり、「雪国」には「温泉報国」という言説は存在しない。ただ、「雪国」の成立過程を辿つてみると、そこには作者が「温泉場」にどう向き合おうとしたのか、その変化の様子や、対応の仕方が読み取れる。では、「雪国」の成立過程と同時代批評を踏まえつつ、「雪国」がどのように変わっていき、何を発信していくのかについて考察したい。

『雪国』は、昭和十年から断続的に発表され、戦前戦後にわたり十三年十一ヶ月を費やして発刊された。「雪国」という名が付いたのは二回で、「旧版」と「決定版」と呼ばれているが、ここで私はあえて、その名を「戦前版」と「戦後版」というように捉えたい。なぜなら、まず刊行時期が旧版のほうは昭和十二年六月、決定版は昭和二十三年十二月であるし、内容の面においても、戦争や外地の反応の影響が表れていると考えるからである。

「文芸時評」欄から探る川端流の「温泉報國」

さて、雑誌『温泉』の国家的な温泉利用の在り方と、こうした川端の『雪国』の世界は、「温泉場」に注目し

最初は七回にわたって雑誌に掲載された。それは①夕景色の鏡（『文芸春秋』昭和10・1）②白い朝の鏡（『改造』昭和10・1）③物語（『日本評論』昭和10・11）④徒労（『日本評論』昭和10・12）⑤萱の花（『中央公論』昭和11・8）⑥火の枕（『文芸春秋』昭和11・10）⑦手毬唄（『改造』昭和12・5）である。それから昭和十二年六月、それらは初版（戦前版）としてまとめられ、『雪国』として世に出るわけであるが、注目したいのは、この一ヶ月前に、新稿を書き加えたことである。初めて本にする際の『雪国』に、作者が意識的に付け加えたかったのは次のような箇所である。

「ねえ、お湯にいらつしやいません?」「ああ。」「御免なさいね。私考へ直して来たの。」（中略）駒子は目を合せるのを避け、少しうつ向きながら先きに立つた。罪をあばかれて曳かれて行く人に似た姿であつたが、湯で体が温まる頃から変にいたいたしいほどはしゃぎ出して、眠るどころでなかつた。（旧版・戦前版、p205～206）

「いい女」という表現をめぐつて島村と駒子が口喧嘩をした後、駒子は島村を湯に誘い仲直りをする。ここでは、「罪をあばかれて曳かれて行く人」を救うものとし

て温泉が機能し、和解の湯としての温泉の意味が強調され、初の本『雪国』が締めくられたわけである。なぜこの場面は、戦前版を出す際に、付け加えられたのだろうか。それから、次に示す島村と駒子の出会いの場面は、駒子に「芸者を世話してくれ」と頼む際の島村の心理が、自分の西洋舞踊の思考に例えられたものであるが、陰影の箇所は、初の本として刊行される際には、削除された。

②「白い朝の鏡」（『改造』）見ない舞踊などは、この世ならぬ天国の話である。舞踊譜や写真や解説から舞踊家の実際の動きを思ひ浮べるほど、はかないものはあるまい。（中略）彼は時々西洋舞踊の研究や紹介を書いて、文筆業者の片端に数へられてゐるがこれほど机上の空論ではなく、天国の詩人とでも名づくべきだつた。それ〔を〕自ら冷笑して、そこに虚無の匂ひを嗅ぐこともあるものの、もしこれも虚無とすれば、これにまさる虚無の甘さはまだあるまい。（中略）創造と云へば云へて、日本舞踊の見物とたいへんちがふところだが、島村の喜びも反つてそこにあつた。自分の眼で見ぬ舞踊ゆゑに、どんなに美しく、またどんなに好きなやうに思ひ描かうと、彼の心のままであつた。夢幻の世界であつた。夕暮の汽車の窓ガラスに写る女の顔のやうなものであつた。さ

ういふ彼の踊の知識が、女を彼に親しませる助けになつたのは偶然だけども、友達づきあひにしておかうと云ふ奥には、今の身の上が曖昧な素人の後くされを嫌ふばかりではなく、知らず知らずのうちに彼女を西洋舞踊あつかひしてゐたのかもしれないなかつた。(『川端康成全集二十四卷』雪国(アレオリジナルp90-92)

「はかない」「虚無の甘さ」「夢幻の世界」という言葉から分かるように、ここで作者は、女性への欲望が単純なものではないことを示したかったのではないか。これは、明らかに作者が最初意識していたはずの(温泉場のトポス力)の一部なのである。ところが、これを消すことになつたのはなぜなのか。この『雪国』の当時の形について「文芸時評」では、この箇所が「無くもがな」「出会して不運なこと」という意見が述べられる。

深田久弥「新年雑誌文芸時評(3) —受難期の一群 川端氏の作品を推す」(『読売新聞』昭和九年十二月二十七日)四十歳近くの中堅作家の小説は次の如く挙げられる(中略)川端氏の「白い朝の鏡」及びその後篇「夕景色の鏡」は傑作である。小説の理屈はともかく、お終ひになるのを惜しみながらたのしみ読めたのは、新年幾十の小説のうちこれだけであ

つた。美しく抒情歌といつてしまへばそれだけに見えるかも知れないが、後篇の汽車の窓の鏡の条などは、美しい音楽に聞き惚れてゐるやうない、気持であつた。前篇の始めの方の西洋舞踊の論は無くもがな。おそらく作者はもつと混沌とした小説を書くつもりで、この不釣合な理屈を挿入したものか。(『文芸時評大系』九卷100七、ゆまに書房、p537)

佐藤春夫「文芸時評」(『文芸春秋』昭和十年二月一日)といふのは川端先生は世間で定評のある名家だのに僕不幸にも今まであまり感心した事がなかつた。といふよりも妙にいつもその世界—といふより文章の調子のなかへ這入つて行けなかつたので不本意に思つてゐた折から今度はほんの一頁かそこらであつたが面白く読めたので興味のつづく限り読まうとしてゐるうちに短いものであつたから通読した。尤も途中で一個所、西洋舞踊研究論みたいな所に出会してこれは不運なことだ。(同十卷、p137)

」の二人の批評を通して分かることは、作者は「温泉報国」という時代的言説のなか、それと対峙できるような〈時代認識〉を持ち、「温泉場のトポス力」を有効に用いることでそれを表していた、ということである。しかし、それが「無くもがな」と言われることになると(川端は十三年以上、文芸雑誌や新聞などで、批評家と

しての活躍を重ねてきた)、確かに初の本にする際には削除が望まれたかもしれない。さらに、右の二人の賞賛とは明らかに異なる批評の文章があることに注目したい。

壺井繁治「創作月評 文芸時評」(註5)『文学評論』昭和十年二月

(一) 「白い朝の鏡」の中の主人公島村の女に対する二様の態度、即ち一方の女を観照的に飽くまで傍観して行かうとする態度と他方の女をただ単に性的享楽の対象として行かうとする態度の中に、ブルジョア的な矛盾が潜んでゐる。けれども作者はこの矛盾を矛盾として追究する代りに、矛盾の発展を幻想の世界の中にはやかせてしまはうとする。(中略)深田久弥の批評(引用者)と賞讃してゐるが、私の考へではそれはこの作者の言葉の魔術に魅惑された結果の感嘆の声ではなからうか? 現実への深い觀察と執拗な追究の上に立つて対象を真実の姿に於て描く代りに、言葉の魔術によつて幻想の世界を織り出さうとする時、そこから当然生み出される傾向は芸術の形式と内容との神祕主義化といふことである。川端康成の今度の作品はさういふ傾向のものとして、ブルジョア社会が内包する頽廃と矛盾の一つの面を幻想化し、神祕化したものとして、注意されねばならぬものである。(同十卷、p105~106)

プロレタリア的な立場にとつては、『雪国』は「頽廃」「矛盾」を「幻想化」した世界に過ぎないということだが、このように、『雪国』の断続掲載物が同時期に両極端の評価を受けていたことから、『雪国』が発信する世界は温泉場での逢瀬が描かれるだけで終わらない重層的世界であることが逆に読み取れる。

この点については、戦前版がすでに出ているにも関わらず、またも四回の追加掲載を行い、二度目の本の出版を行つた作者の意識ともつながつてゐる。川端は、『雪国』が一度本になつたものの、その続きを、(8)雪中火事(『中央公論』昭和15・12) (9)天の河(『文芸春秋』昭和16・8) (10)雪国抄(『暁鐘』昭和21・5) (11)続雪国(『小説新潮』昭和22・10)と掲載し、昭和二十三年十二月決定版(戦後版)を出版するが、ここで注目したいのは、「温泉場で起きた火事」の場面が七年間かけて書き続けられたことや、「温泉場から離れるはずみ」をつけたい島村の様子が描かれたことである。川端は戦後版『雪国』で、どんな「温泉文学」を目指したのか。

かうした人間の身の添ひ馴れは縮ほどの寿命もないなどとぼんやり考へてみると、ほかの男の子供を産んで母親になつた駒子の姿が不意に浮んで来たりして、島村ははつとあたりを

見まはした。(中略) こんど帰つたらもうかりそめにこの温泉へは来れないだらうといふ気がして、(中略) そこで島村は縮の產地へ行つてみると思ひついた。この温泉場から

離れるはずみをつけるつもりもあつた。(雪国) 創元社(決定版・戦後版)、昭和二十三年十一月、p190～191) なにをしに行つたのかわからず島村は温泉場に戻つた。(決定版・戦後版、p195)

温泉場から離れるはずみをつけようとしたにも関わらず、島村は徒らに温泉場に戻つてしまつた。その帰り道で会つた駒子が、「どこへ行つた? ねえ、どこへ行つた?」(p196)、「どうして私を連れて行かないの? 冷たくなつて来て、いやよ」(p198)と、島村の気持ちの変化を責めていくなかで、次に唐突とも思える火事の場面が続く。

突然擦半鐘が鳴り出した。二人が振り向くと、「火事、火事よ!」「火事だ。」火の手が下の村の真中にあがつてゐた。(p199) おもぢやの火事のやうに静かだつた。そのくせさまじい炎の音が聞えさうな恐しさは伝はつて來た。島村は

子を抱いた。(p200) 駒子も誘はれて走り出してゐた。島村も追つかれた。(中略) 「天の河。きれいねえ」駒子はつぶや

くと、その空を見上げたまま、また走り出した。(決定版・戦後版、p202)

それから、火事場へ向かう島村と駒子の様子に、切ない別れを予想した駒子の気持ちが次のように綴られる。

「ねえ、あんた、私をいい女だつて言つたわね。行つちやふ人が、なぜそんなこと言つて、教へとくの?」駒子が簪をふすりふすり置に突き刺してゐたのを、島村は思ひ出した。「泣いたわ。うちへ帰つてからも泣いたわ。あんたと離れるのはいわ。だけどもう早く行つちやいなさい。言はれて泣いた」と、私忘れないから。(決定版・戦後版、p205)

このように〈戦後版〉『雪国』は、温泉場の火事の場面をめぐる推敲や改稿に七年が費やされ、島村と駒子の高まる気持ちが描かれる。では、作者が温泉場で起きた火事にこだわつたことや、〈戦後版〉の出版にむけて主人公たちの悲劇的な別れを予想させるような仕上げをしていったことの理由はどこにあるのだろうか。

理想化された〈温泉場〉と外地の日本人
〔雪国〕 作者自身の言葉である。

私の作品のうちでこの「雪国」は多くの愛読者を持つた方が、日本の國の外で日本人に読まれた時に懐郷の情を一入そそるらしいといふことを戦争中に知つた。これは私の自覚を深めた。(『雪国』創元社(決定版・戦後版)あとがき(昭和二十三年六月)、p220)

『雪国』が外地で読まれていたことを受け、作者自身の「自覚」が深まつたという。すると、外地で読まれた『雪国』は何版であり、読者は何を思ったのか。

「雪国」を出版した年に支那事変が始まつた。さうして私の四十年の大半は戦時であつた。(中略) 戦争中も作家としての私は必ずしも不幸ではなかつた。私の作品は平和時よりも痛切な愛情をもつて読まれてゐた。私は逆に出征兵士から多くの慰問文を受け取つた。殊に異境にあつては私の作品が故国日本を思ふよすがとなるらしかつた。満州や北支那でも私の作品を朝夕の日課のやうに読んでゐてくれる婦人達に出会つた。防空壕で私の作品を見て氣を鎮めるといふ人々もあつた。(中略) 昭和二十年十二月鎌倉にて(『雪国』現代文学選7川端康成篇鎌倉文庫版(昭和二十一年)あとがき、p309)

駒子がいひなづけの約束を守り通したこと、身を売つてしまで療養させた」とも、すべてこれ徒労でなくてなんであら

外地で読まれたのは、戦前版『雪国』であるはずだ。

そこには、時局を連想させるかのよう温泉場の火事や転落の場面はまだ描かれない。また傍線部から分かるように、戦前版『雪国』は、外地の出征兵士、満州にいる婦人たち、防空壕の人々を思い出させる装置として機能していた。それを可能にしたのは、戦前版の『雪国』が〈客と温泉場の女〉の逢瀬の物語で、そこには〈温泉場のトボス力〉が含まれているからではないか。川端は、時局の現実感とは切り離された〈温泉場〉を有效地に用い、自らが理想とした「温泉文学」を『雪国』という形で生み出したのである。それは、外地の兵士に「温泉文学」として読まれ、故国日本を思い出させる装置として機能した。

強調される「徒労」「非現実」「無抵抗」

ところが、このように〈温泉場〉という装置が理想的に用いられた『雪国』は、雑誌『温泉』の「温泉報国」という言説とどう対峙できるのか。また『雪国』が十四年間にもわたつて発信しようとしたものは何だろうか。

う。駒子に会つたら、頭から徒労だと叩きつけてやらうと考へると、またしても島村にはなにか反つて彼女の存在が純粹に感じられて来るのだつた。(旧版・戦前版、p81)

「徒労」という意識の問題に注目したい。駒子と再会した時の島村の心理は二重の面を持つていた。「指」が「一番君を覚えていた」と、駒子に甘えている島村の様子からは再会の喜びが表れている。しかし、島村の眼に写つた駒子の生き方は不思議なものだつた。彼女を純粹に思う気持ちと彼女の生き方を「徒労」だと思う気持ちがせめぎあう。また、温泉場の火事を描く最終場面を次のように、皮肉的に捉える。

その弓の前にふつと女の体が浮んだ。さういふ落ち方だつた。女の体は空中で水平だつた。島村はどうきつとしたけれども、とつさに危険も恐怖も感じなかつた。非現実的な世界の幻影のやうだつた。硬直してゐた体が空中に放り落されて柔軟になり、しかし、人形じみた無抵抗さ、命の通つてゐない自由さで、生も死も休止したやうな姿だつた。(p213) 駒子は芸者の長い裾を曳いてよろけた。葉子を胸に抱へて戻らうとした。(中略) 駒子は自分の犠牲か刑罰かを抱いてゐるやうに見えた。(決定版・戦後版、p215)

温泉場で魅力を感じたもう一人の女性の転落の場面を「非現実」に捉え「無抵抗さ」「自由さ」とも捉えていいのである。このことを、西川博士の「温泉報国」という言説と照らし合わせれば、川端が『雪国』に託した思いが明らかになるのではないか。当時の「温泉報国」と相反する島村の温泉利用が語るメッセージは、もはや逢瀬の喜びだけではない。

4.まとめ

以上、川端と西川博士の関わりから、雑誌『温泉』に川端が「温泉雑記」のみを発表したことの経緯について推理し、『雪国』の人間模様が、当時の国家的な温泉の利用とは異なつていたことを見てきた。川端は「温泉報国」になりつつある時代的状況のなかで、『温泉場』に思いを託し、意識的に物語のなかへ(温泉場のトポス力)を有効に持ち込むことによつて、『雪国』を生み出していく。当時の温泉場をめぐつて考えれば、『雪国』の世界と現実の間には明らかな相違が見られる。この相違は何を示唆するのか。一見、温泉場へ眼を向け温泉の

在り方に関して強く意識している点は一致しているかに見えるが、戦時下における協会の富国強兵的な温泉の取り扱い方は、温泉場での逢瀬に「虚無」までを描いた川端の捉え方とは大きく異なっていた。川端は時局とは切り離された人間模様を描くことによって、時代と対峙し、作者独自の理想の世界を構築していたのである。結局『雪国』と『温泉報國』は、相容れない関係でありながら、当時の温泉場をめぐる状況を鮮やかに表している。

(※『雪国』の本文—戦前版と戦後版—と『温泉』の記事は、すべて旧漢字を新漢字に改め、旧仮名づかいはそのままとした。傍線等は引用者による。)

注

(1)『伊豆と川端文学事典』(川端文学研究会、一九九九、勉誠出版)では、小説五十一編、隨筆・解説等四十九編を対象としている。

(2)川端と〈温泉場〉についてのこれまでの研究は、単に川端の実人生において湯ヶ島がどれほど第一の故郷だったかを指摘(三田英彬「川端康成と湯ヶ島温泉」

(『大正大学研究紀要』、二〇〇四年三月)、また伊豆閑

係エッセイが実際どの温泉地を背景にしているのかを結びつける(山田吉郎「伊豆(中、南、南伊豆)と川端文学—隨筆と小説との交響」(一九九九、『国文学解釈と鑑賞』))などが中心であった。しかし、それだけでは、川端が物語に〈温泉場〉を取り入れて創作し続けた思いを解説することはできない。

(3)日本温泉協会の〈役員〉(『温泉』第五卷十月号(昭九)による)会長・公爵一条実孝 副会長・内務次官丹羽

七郎・鉄道次官喜安健次郎 常務理事・ジャパンツーリストビューロー専務理事高久甚之助・内務省衛生局技師松尾仁・内務省保健課長藤原孝夫・鉄道省國際觀光局事業課長高田寛・鉄道省旅客課長鈴木清秀 監事・内務省衛生局長大島辰次郎・鉄道省國際觀光局長田誠・

鉄道省運輸局長新井堯爾 関東支部長・東京鉄道局長池田勝三郎(中略)満州支部長・満鉄会社理事宇佐美寛爾(学術部委員会)東大医学部教授林春雄・医学博士八田善之進・医学博士西川義方・医学博士酒井谷平・内務省衛生局技師南崎雄七・東京衛生試験所長衣笠豊・東京地方裁判所判事武田重治・中央気象台技師藤原咲平(学術部委員は、計二十四名であるが、省略する

(4)「温泉厚生運動」に関する記事は以下のとおりであ

る。昭和十四年十卷七号「温泉厚生利用展を観る記者」

(p30)、十卷十二号〈門鉄主催〉温泉厚生利用座談会

(p30)、昭和十五年十一月十号眞鍋嘉一郎「厚生資源と

しての温泉」(p65)、十一月十二号木暮武太夫「人的資

源確保と温泉」(p2)、昭和十七年十三月一号「産業戰

士の温泉利用を語る座談会」(p20)、十三月二号翁片里

「温泉厚生の文化運動」(p40)、十三月六号「產報厚生

部長野津謙「産業戰士の保健問題と温泉利用」(p2)、

十三月七号「温泉厚生運動特集号」、「日本温泉協会厚

生運動方針」(p2)、十三月九号畠峻義等「温泉厚生運

動の理念」(p2)、十三月十号「厚生対策と温泉保養所

学童の保健と温泉」、坂本金吾「労務者厚生対策とし

ての温泉」(p2)

(5) 〈川端康成の文芸時評の活動について〉

◎九月本選集のあとがき（昭和十三年）：私はまた一度は、日本文学古今の散文を読み散らしてみたいと思つてゐる。今の世に生きた一作家が日本の文学のあらましにわたつて、なにを見たか、どう感じたかを書き残しておくのも、必要な義務と感じられる。作品批評家としての私は自分の眼を絶対に信じ通して來た。しかし、私の批評の主な仕事の文芸時評は、この卷に入らなかつた。文芸時評とは日々の雑誌の作品を短評する

」とで、私はそれを根気よく十三年間書き続けた。私は作家としてよりも先づ時評家として、文壇に登場したと言つてもよい。（中略）文芸時評はその月々と共に

消え去つてゆくものとして、一般に軽んじられ、それを後から著書に纏める人は稀であるが、私は一種の曆のやうな意味でも、自分の影のやうな意味でも、棄てるには多少の未練がある。（「自著序跋」『川端康成全集第三十三卷』、p577）

◎川端康成「文芸時評　お別れの時評　時評軽蔑すべきらず」昭和十年）：敬ふべからざる文芸時評を、私はしばらく休むことにした。予て約束あるこの批評を最後に、当分書かぬ。これは長い念願の現実に過ぎぬ。文芸時評は私にとって、頭の若返り運動法であつたかもしれないけれども、實にまた心身の浪費でもあつた。月々の小説を濫読することが、既に無駄な疲労であるばかりでなく、極言すれば、精神の堕落である。賢明な文芸時評家小林秀雄氏などは、自分の編輯して来た「文学界」さへ、余り読まぬかと疑はれる（中略）文壇の事情通である私が、仮りに文壇の門外漢といふ立場にも立つて新年の作品を眺めてみた。

(6) 〈雪国〉の成立過程の問題に関する先行研究を示しておくる。まず決定版の『雪国』の縮み産地に行くエピソード

ドなどに、『北越雪譜』（鈴木牧之著、天保七年）の影響があることは、川端自身も認め、指摘され続けている。また平山三男氏の著書『川端康成『雪国』湯沢事典』（湯沢町役場・教育委員会、平成九年）では、掲載された各プレオリジナルテクストや作家周辺の伝記的な事項について詳しく述べられる。さらに当時の出版ジャーナリズムについて考察し、断続掲載に原因を求める研究は、金井景子氏「『雪国』成立過程の検討」（『山崎学園富士見中・高等学校研究紀要』、一九八一年四号）などがある。ただ、本稿ではこれらの先行研究について論じることはせず、「雪国」の生成に、「温泉文学」というジャンルの問題が関わっていることを明らかにしたい。

(7)

火事のエピソードが描かれたのは、実際川端が見た事故をベースにしていると、平山氏はすでに指摘している。ただ、ここでは、なぜ七年間も火事の場面をめぐって改稿していくのかについて考えたい。

(い・みよんひ／名古屋大学大学院博士課程後期)